

巻頭言 大西洋のマグロ

今年の初めごろ、タイセイヨウクロマグロをワシントン条約で保護することが国際会議で話合われ、ほとんど採択確実というところまで行ったのだが、日本が中国やリビアと組んでひっくり返した。このニュースに一般の日本国民はおおむね無関心といったところで、「別にトロなんか毎日食べられなくていい」という声もある一方、テレビのコメンテーターなどの間では、「日本の評判を落とすから、反対するのはやめたほうがいい」という意見も聞かれた。私は、水産庁は何を背景にこんながんばっているのかと思いながら見ていた。

大西洋のマグロ漁業は、日本の商社が現地で技術指導した「蓄養」が中心である。産卵集団を一網打尽にしてイケスに入れ、太らせたマグロを買い付けるという形で、大量に日本に入ってきていた。しかしタイセイヨウクロマグロの資源は急減しており、産卵群の消滅も時間の問題と言われている。日本も参加する ICCAT（大西洋マグロ類保存国際委員会）なる管理組織はあるが、規制が守られず乱獲に歯止めがかからない。そこでやむなくワシントン条約が持ち出されたわけであった。

捕鯨の話もそうだが、私がこういう話を聞くたびに思うのは、かつての日本の沿岸資源の豊かさである。たとえば紀州田辺湾では、昭和初期の漁業の姿についてこんな記録が残っている。「春にはハマチ、ブリ、シマアジ、イワシなど、夏から秋にかけてはマグロ、カツオなど、毎年のようにやってきた」「シビ（若令のマグロ）など、数知れぬほどの群れが次々と湾内奥まで、背ビレ尾びれを二、三十センチくらい出して泳いでいる姿は壮観」「海の中が赤く見えるので、磯だと思って網を入れたところシビの大群で、網をかつぎ去られたという笑い話も…」成長した大型のマグロも、湾の奥まで入ってきたという。清流の河口にシラウオが寄り、内湾にはアマモ類が密生して稚魚など多くの海産生物に住み場を与えていた。これはひとり田辺湾の状態ではなく、この頃の南日本太平洋岸の内湾の一般的な姿であったろう。しかし乱獲と汚染、埋立てなど環境破壊で沿岸漁業は衰退。日本の漁業は太平洋に乗り出し、南氷洋から大西洋まで進出して魚を取りまくることになった。

近ごろ沿岸漁業再生の旗手として、養殖がもてはやされている。マグロ、ウナギでは卵からの完全養殖も成功しつつあるようだ。私は養殖の技術的進歩は評価するが、全体としてあまり意味のあることをやっているとは思えない。こういう思考実験はどうだろう。養殖場を24時間立ち入り自由とし、いつだれが取ってもよいとする。おそらくまたたく間に、育ちつつある幼魚まで含めて、イケスの魚は根こそぎにされるだろう。そしてこれが、かつての日本の海の姿である。私が言いたいのは、沿岸漁業の再生は技術の問題ではなく、管理の問題だということだ。養殖や蓄養が成立するのは、イケスの中の魚の所有権が明らかだからにすぎない。多額の開発費を投じ、技術の粋を尽して養殖に取り組まなくても、もともと沿岸部の海には豊富な生産力が備わっている。1990年代の初め、田辺湾にマガキが大増殖したことがあったが、ある人

はそれを見て「カキの養殖などばかばかしい限り」と評していた。

沿岸漁業衰退の主要因は環境破壊だが、乱獲の問題も無視できない。無制限な漁獲により、ニシン御殿、アワビ御殿が立ち並ぶ中、資源は枯渇し、近年のアサリの激減についても乱獲の影響が指摘されている。漁業は自然の恵みの範囲内で行われるのが本来の姿である。環境保全に加えて適正な採捕量を守ることで、日本沿岸の豊富な資源を復活させることが求められている。近ごろでは経済活動の停滞もあって浅海の汚濁がやわらぎ、田辺湾でもいったん消えた生物の多くが復活しつつある。こういう今こそ好機といえよう。

水産庁は目先の利益に追われる業界団体の方ばかり見ず、沿岸資源復活のための道筋を示すべきである。自国の周辺すらまともに管理できない国が、地球の裏側まで出かけて行って「資源管理」だの「科学的評価」だのと言ってみたところで、説得力はない。

< S >